

文部科学省 課題解決型高度医療人材養成プログラム選定事業
「健康長寿社会を担う歯科医学教育改革
—死生学や地域包括ケアモデルを導入した医科歯科連携教育体制の構築—」
継続事業

九州大学歯学会共催 連携シンポジウム
「健康長寿社会に向けた歯学教育改革」

2022 年 12 月 16 日（金）・17 日（土）

九州大学歯学部 講義室 A B

◆プログラム

文部科学省 課題解決型高度医療人材養成プログラム選定事業「健康長寿社会を担う歯科医学教育改革—死生学や地域包括ケアモデルを導入した医科歯科連携教育体制の構築—」継続事業
九州大学歯学会共催 連携シンポジウム「健康長寿社会に向けた歯学教育改革」

会場：九州大学歯学部 講義室 A B

開催形式：ハイブリッド開催（現地＋Zoom ライブ配信）

■ 1 日目 2022 年 12 月 16 日（金）16:30～18:30

16:30～17:00 第 9 回歯学教育改革コンソーシアム事業推進委員会（担当者のみ）

17:00～17:20 シンポジウム受付

17:20 開会の辞 九州大学大学院歯学研究院長 中村誠司
本事業責任者・岡山大学教授 窪木拓男

17:30～18:30 特別講演 座長：中村誠司（九州大学大学院歯学研究院長）

演者：島田敬士（九州大学大学院システム情報科学研究院 教授）

演題：九州大学における教育 DX ～データ駆動型教育の実現に向けて～

■ 2 日目 2022 年 12 月 17 日（土）10:00～14:40

10:00～11:40 シンポジウム 1 異分野融合型災害医療教育の展望

座長：和田尚久（九州大学大学院歯学研究院 総合診療歯科学分野 教授）

演者：山添淳一（九州大学病院 高齢者歯科・全身管理歯科 講師）

演題：多職種連携の災害医療支援を担う歯科医療人材養成プログラム

演者：福本 敏（九州大学歯学研究院 小児口腔医学分野／東北大学大学院歯学研究科 小児発達歯科学分野 教授）

演題：東日本大震災での歯科対応における情報伝達的重要性について

演者：田中真理（九州大学基幹教育院 教授）

演題：災害支援に求められるもの：東日本大震災における心理支援をふまえて

演者：杉本めぐみ（九州大学男女共同参画推進室 准教授）

演題：九大の学際融合講義「九州の防災」の取組み紹介と今後の歯学の災害支援拡大への期待

（休憩・昼食）

12:10～12:50 教育講演

座長：柏崎晴彦（九州大学大学院歯学研究院 高齢者歯科学・全身管理歯科学分野 教授）

演者：山崎 裕（北海道大学大学院歯学研究院 口腔健康科学分野 高齢者歯科学教室 教授）

演題：歯学生に必要な漢方教育

13:00～14:30 シンポジウム 2 健康長寿社会に向けた連携教育体制

座長：築山能大（九州大学大学院歯学研究院 歯科医学教育学分野 教授）

演者：岸本裕充（兵庫医科大学医学部歯科口腔外科学講座 主任教授）

演題：薬剤関連顎骨壊死の予防を通じて若手口腔外科医に医科歯科連携を教育

演者：吉田礼子（鹿児島大学 歯科総合診療部 診療講師）

演題：アクティブラーニング「チーム医療学」の実践

演者：岩佐康行（社会医療法人 原土井病院 副院長、歯科部長、摂食・栄養支援部長）

演題：地域包括ケアシステム（介護医療院）と学生教育

14:30 閉会の辞 九州大学病院副病院長 西村英紀

【特別講演】

九州大学における教育 DX ～データ駆動型教育の実現に向けて～

講師 島田敬士

九州大学大学院システム情報科学研究院 教授

コロナ期を経て教育分野では教育現場への ICT（情報通信技術）の導入が進み、オンライン教育に留まらず対面教育においてもデジタル環境の活用が広がっています。ICT を活用した教育・学習は、デジタルな環境を利用した新しい教え方や学び方を実践できるだけでなく、教育・学習の過程やその成果など様々な教育・学習活動をシステムに細かくデータとして記録できるという利点があります。このようなデータは教育データと呼ばれており、教育データを分析することで、どのような学習を行ってきたのか、どのような支援が必要なのか、支援は本当に有効であったかどうかなど、教育・学習の支援やその効果検証などをデータ駆動で行えるようになります。

九州大学では、2013 年頃から学生の PC 必携化を行い、その後、学習管理システムや電子教材配信システムなどの学習支援環境を利用した教育を行ってきました。さらに、システムに蓄積される教育データの分析や、分析結果のフィードバックを通して教育・学習改善を行うラーニングアナリティクス研究を進めてきました。一連の取り組みは、近年、注目が集まる教育分野の DX（デジタルトランスフォーメーション）や、データ駆動型教育の実現に向けて非常に関連の深いものになります。本講演では、「九州大学における教育 DX ～データ駆動型教育の実現に向けて～」という題目で、ラーニングアナリティクスを基軸とした本学における教育 DX ならびにデータ駆動型教育の実現に向けた最新の取り組みを紹介いたします。

略歴：

2007 年九州大学大学院システム情報科学府博士後期課程修了 博士（工学）

2007 年 4 月より九州大学大学院システム情報科学研究院 助教

2013 年 10 月より同大学基幹教育院 准教授

2017 年 4 月より同大学大学院システム情報科学研究院 准教授

2019 年 10 月より教授、現在に至る。

JST さきがけ研究者兼任。ラーニングアナリティクス、パターン認識、メディア処理、画像処理に関する研究に従事。

受賞歴：

2019 年 IPSJ/IEEE-CS Young Computer Researcher Award

令和 2 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰若手科学者賞 ほか

【シンポジウム 1】 異分野融合型災害医療教育の展望

1. 多職種連携の災害医療支援を担う歯科医療人養成プログラム

講師 山添淳一

九州大学病院 高齢者歯科・全身管理歯科 講師

近年、日本各地で大規模な災害が発生しており、災害時医療の充実が急務である。大規模災害時は現地の医療機関は機能が停止し、医療スタッフも人員不足となる。九州大学大学院歯学研究院（以下、九大歯学）は、平成 23 年の東日本大震災、平成 28 年の熊本地震、平成 29 年の九州北部豪雨において、歯科口腔保健医療支援チームとして出務し、被災住民の食事・栄養関連の医療支援や災害関連死（特に誤嚥性肺炎）予防のための支援活動を行うとともに、亜急性期～慢性期～復興期の災害時の保健医療を展開し、地域社会の安全・安心に貢献してきた。これらの経験から、来るべき災害への対応において、各災害フェーズに応じた各医療職種協働の医療支援活動、及び行政や公安機関と連携した個人識別を主とする歯科法医学活動を多職種と円滑に連携して実施できる歯科医療人材の育成が喫緊の課題と考えた。

九州大学歯学研究院は、熊本大学病院を主幹とする平成 30 年度文部科学省 GP 課題解決型高度医療人材養成プログラム『多職種連携の災害支援を担う高度医療人養成』に連携校として採択された。平成 31 年 1 月より口腔医療連携学分野を設置し、歯科医療者向けの教育プログラムを構築した。講義は、災害の規模、タイプ、フェーズに応じた災害時の医療支援活動について学ぶことができる、合計 35.5 時間の e-learning 形式のものを構築した。また、平成 30 年度に九州地区連合歯科医師会と共催し、福岡県内の 2 歯科大学の協力を得て『災害口腔医学研修会』の主催し、九州地区の 3 つの県内で開催した。「要配慮者への災害時歯科医療支援者の育成と支援ネットワークの拡大」というテーマでシミュレーション教育を行い、九州各地で後方支援の中核となるリーダー育成も視野に入れた内容で行った。令和 3 年度には、『災害時歯科口腔医療』をテーマとした臨床研修歯科医師の研修プログラムを構築した。災害時の歯科医療職種の重要項目である①災害歯科保健医療支援活動、②歯科法医学的活動、③災害拠点病における歯科医療職種の役割についてエッセンスを凝縮したシミュレーション研修としている。

また、口腔医療連携学分野では医療専門職における多職種連携、人工知能などのテクノロジーの活用に向けた工学者との連携を図り、社会歯科学研究の 1 つとして、災害時における歯科的個人識別システムの構築を目的とした研究チームを立ち上げた。

昨今の災害多発社会の中で、多職種連携した災害医療人育成は注目されているが、歯科医療の専門性に目を向けた、体系的かつ包括的災害医療人育成プログラムは本邦において新規的であり、構築した教育プログラムは他の医学教育機関のモデルケースとなりうると考えている。

略歴：

平成 13 年 3 月 九州大学歯学部 卒業
平成 19 年 3 月 九州大学大学院歯学府歯学専攻博士課程 修了
平成 13 年 4 月 医療法人西厚会 西村歯科医院（佐賀県） 勤務
平成 19 年 8 月 九州大学病院 口腔総合診療科 助教
平成 22 年 9 月 福岡歯科大学 麻酔科
平成 25 年 4 月 医療法人博仁会 福岡リハビリテーション病院 歯科
平成 28 年 1 月 九州大学病院 口腔総合診療科 助教
平成 31 年 1 月 九州大学大学院歯学研究院 口腔医療連携学分野 講師
令和 3 年 4 月 九州大学病院 高齢者歯科・全身管理歯科 講師
現在に至る

所属学会・資格：

日本老年歯科医学会 専門医 代議員 認定制度委員会幹事
日本障害者歯科学会 認定医
日本歯科麻酔学会 認定医
日本摂食嚥下リハビリテーション学会 認定士
日本口腔インプラント学会 専門医
日本歯周病学会 認定医
日本災害医学会
福岡県 DMAT ロジスティック

災害支援活動等：

平成 28 年 4 月 熊本地震支援活動（南阿蘇村）
平成 29 年 7 月 九州北部豪雨災害支援活動（朝倉市、東峰村）
平成 30 年～ 『多職種連携の災害支援を担う高度医療人養成』（平成 30 年度文科省 GP 課題解決型高度医療人養成プログラム採択事業）

2. 東日本大震災での歯科対応における情報伝達の重要性について

講師 福本 敏

九州大学大学院歯学研究院 小児口腔医学分野 教授

東北大学大学院歯学研究科 小児発達歯科学分野 教授

本邦においては毎年様々な災害に遭遇し、その対応に追われているのが現状である。個々の災害の原因は異なるが、生活が困難な状況の中での歯科的な対応や支援は共通していることから、それぞれの震災での経験を集約し、正しく情報伝達する体制の構築が極めて重要であると考えられる。

東日本大震災では、多くのインフラが停止し、支援を必要とする人たちとの物理的距離も大きかったこと、また検視活動などの対応も必要であったことから、支援に要する人材の不足も大きな課題であった。つまり、誰がどのように対応すべきなのか、災害のフェーズによって変化する支援の要求に対して、適切に対応するにはどのような情報が必要かなど、これまでに多くの課題が提示されてきました。また本シンポジウムも含め、災害に対応する人材の育成プログラムも継続的に実施されるようになってきたが、今後起こりうる大規模震災に対して、適切に対応できるかどうかは十分検証されるには至っていない。

そこで東日本大震災での歯科的な課題と対応法、またこれらの経験がその後の熊本の震災にどのように生かされたかなど、私の経験も踏まえ整理していきたいと思います。

略歴：

1994 年 3 月 長崎大学卒業

1994 年 4 月 長崎大学歯学部 助手

1998 年 4 月 日本学術振興会特別研究員 (DC1)

2000 年 3 月 長崎大学大学院歯学研究科博士課程修了

2000 年 4 月 長崎大学歯学部 助手

2000 年 10 月 米国国立衛生研究所客員研究員

2003 年 4 月 長崎大学病院 講師

2004 年 4 月 九州大学大学院歯学研究院 助教授

2007 年 11 月-現在 東北大学大学院歯学研究科 教授

2019 年 4 月-現在 九州大学大学院歯学研究院 教授

3. 災害支援に求められるもの：東日本大震災における心理支援をふまえて

講師 田中真理

九州大学基幹教育院 教授

防災教育から共生教育へ：臨床心理士としての支援体験から

「逃げ遅れる障害者」「迷惑かも：車中泊一週間」「情報伝わらず自宅に1人」…。これらは、震災のたびに災害弱者の被災状況について報道される新聞など記事のタイトルである。これらのタイトルにはどれも、災害がどのひとにも等しく襲いかかるわけではないことの問題性が凝縮されている。「移動の障害」は迅速な避難行動がとれないことを引き起こし命の危険を、「コミュニケーションの障害」はひととのつながりを断たれ、自身の要求も周囲からの指示も伝わらないために大きな混乱を、「情報の障害」は今何が起きておりそのことで自分にどのような危険が迫っているのか、そのために起こすべき行動が何なのかがわからない激しい不安をもたらすこととなる。自然災害の「人災 human disaster」の側面として、障害と貧困がもたらす脆弱性や社会構造制度上の社会環境の障壁がある。ここに共生教育としての防災教育の意味が問われる。防災教育は単に災害時の行動訓練ではなく、非常時を支える日常の関係性の構築、つまり多様なニーズをもった多様な人々で構成された共生社会で生きるための防災を担う人材の育成が求められる。

PTSD 対応とともに PTG を：被災児との関わりから

震災に遭った子どもに何が起きるのか。赤ちゃん返り、災害ごっこ遊び、分離不安、音への過敏性…等々、いわゆる PTSD と関連する姿を想像することが多いだろう。しかしながら、このような側面ばかりではなく、生きるための力、目の前で起きていることにきちんと向き合う力、人を支える力を発揮している姿、つまり PTG (Posttraumatic Growth) もまた震災に遭った子どもに起きた大切な姿である。このことはもちろん子どもに限ったことではない。本来持っているこころの柔軟な可塑性、ナイーブな感性、自分の強さへの実感、スピリチュアルな変容、命への感謝、他者への思いやり等は、PTGに含まれるポジティブな変容である。被災者が苦しみ・恐怖・不安・悲しみのなかから自ら自分の力を最大限に引き出すことをサポートすること、これこそが真の心のケアだといえるだろう。

外部支援者は名脇役に：被災支援者としての体験から

被災地の支援者は、いうまでもなく被災支援者である。東日本大震災ではマスコミが沿岸部の津波被害を中心に上げられていることからか、内陸の市街地が「平和」で「日常」の心の動きがそこに流れていることを前提としている外部支援者も少なくなかった。東京都こころのケアチームでは、派遣事前説明会時に、「現地に行って最初に会う被災者は現地スタッフである」という基本的心得を強く強調していた。その後、DPAT (Disaster Psychiatric Assistance Team) 活動3原則のひとつに、「支援活動の主体は被災地域の支援者である。地域の支援者を支え、その支援活動が円滑に行えるための活動を行う」ことが掲げられるようになった。外部支援者は短期派遣であることや地元支援者と外部支援者とでは情報量が圧倒的に違うことから、現地の多職

種のなかでのチームスピリット機能やリエゾン能力は必須である。そのための配慮点として、共感的態度、情報提供や活動協力の負担への気遣い、批判と受け取られかねない言動を慎むこと（Non-Judgemental Attitude）、健全な楽観主義をもつこと等は非常に重要である。

略歴：

九州大学基幹教育院教授〔現職〕、博士（教育心理学）

九州大学大学院博士課程修了後、東北大学大学院教育学研究科准教授・教授等を経て、2014年から現職。

研究テーマ：発達障害者の心理臨床

臨床心理士・公認心理師として、医療（精神科、小児科）、教育（スクールカウンセラー）、矯正（少年院・少年鑑別所）、産業（（株）パナソニック産業カウンセラー）、福祉（障害者福祉センター）の領域で臨床を行ってきた。

著書に『東日本大震災と特別支援教育』（慶応義塾大学出版会、2016年）、『知的障害者とともに大学で学ぶ』（東北大学出版会、2022年）等、その他共著書、論文多数。

東北大学在職中に東日本大震災を体験し、多くの障害のある仲間や子どもたちを亡くしてしまったことへの猛省が、現在の仕事へ向かう原点のひとつです。

九州大学ではキャンパスライフ健康支援センターインクルージョン支援推進室室長として、インクルーシブキャンパスの構築にむけた支援業務も兼務しています。

4. 九大の学際融合講義「九州の防災」の取り組み紹介と今後の歯学の災害支援拡大への期待

講師 杉本めぐみ

九州大学男女共同参画推進室 准教授

新型コロナ禍でも、温暖化により激甚化する気象災害と切迫する地震災害に対応して行くため、異分野で連携を拡大して備えて行くことは、支援のエアポケットを作らないためにも重要である。広域災害において特に生存可能性の高い「黄金の 72 時間」以内の対応が勝負になる災害医療において外部支援 DMAT 等に頼れない切迫した事態の可能性もある。救急救命医以外にも地元の多様な医療関係者で地域医療を支えるために、裏方のコーディネーションや表に立ったリーダーシップを取る多様な人材の育成が求められる。そういった急性期の緊急対応から避難所・仮設住宅に移行する亜急性期までの被災者の医療と健康を支えることができる人材として、歯学関係者には大きな期待を寄せている。

今年度九大歯学部 5 年生に社会防災の専門家として講義をする機会をいただいている。災害研究や赤十字等の被災者支援の実務家として国内外の被災地での知見を直接伝えることは、災害時医療の人材育成としてだけでなく、専門の異なる互いの立場や意識のギャップを埋め、相互理解が進み被災現場のステークホルダー間の連携がよりしやすく、被災者へ裨益になると考える。

その受講生の社会貢献意識の高さ、学びに対する気づきの多さや柔軟性に驚かされた。グループワークで「被災現場であなたは何かができるか」を議論した際、従来の歯科治療の守備範囲にとどまらず、トラウマを抱えている被災者への傾聴による寄り添い、ネグレクトの状態にある児童への対応など次々と新しい提案が出た。高齢化社会の日本における避難所の高齢者ケアの支援だけでなく、子どもたちへの目配りと今後の活躍の場の広がり可能性を感じている。若い学生たちの専門性にとらわれず、自分を黒子にして被災者に向き合い、多職種連携チーム医療の調整役を考えることもできる歯科医師の卵たちに感動を覚えた。さらに、拙著ユネスコ災害ハンドブック^[1]の持ち出し袋の例示に「歯ブラシが無い」と指摘を受け、お恥ずかしいことに慌てて改訂した。指摘してくれたのは、熊本地震の災害実習で引率し指導してきた歯科医師免許を既に取得している大学院生だった。職位や年齢や専門領域を超えて、共に学び合う日頃の異分野融合教育こそが、災害時の多様なステークホルダーの協働を成功に結び付けるものと確信した。

一般的な防災の基礎知識が付くように九州大学基幹教育院のオムニバス講義「九州の防災—熊本地震からあなたの身の守り方を学ぶ」の世話人として、学際融合の防災教育を 2017 年に開始した。2016 年熊本地震直後に学生から「九大に総合的な防災の講義を」という要望に、九州大学では災害に関して様々な学部で教員が研究だけでなく支援もしており、文系理系を問わず、様々な学部から教員 15 名で応えた。さらに 2017 年九州北部豪雨の被災地朝倉をはじめ、水害は夏季に集中し易く、熱中症が心配される発災直後の被災地実習に歯科医師の同行は心強い。本講

義を纏める形で、同名の教科書^[2]を出版、歯学部から推薦いただいた講師にもご寄稿いただいた。2018 年から一般市民に公開講義にしている。

歯科医師が災害急性期から医療チームDMATの隊員や歯科医師チームとして災害現場入りしているのは社会でも基幹教育の履修生にもあまり知られていない。担当しているNHK ラジオの防災番組や新聞連載^[3]で歯科医師の活動や貢献について紹介したところ、「知らなかった」、「意外だ」という反応が多かった。人材育成でDMATに参加できるレベル、街の医療従事者に災害時に地域の災害時医療に貢献してもらうレベルなど大学教育の中で複数のプログラムから選択肢を増やして災害医療人材の育成をしていくこと。これらのような災害現場での歯学関係者の活躍が広がっていくとともに、こういった歯学関係者の被災地での貢献について一般的防災知識として社会全体が知る機会を持つ教育も必要だと痛感している。

参考文献等：

1. ユネスコ災害ハンドブック：World book on local disaster management experiences for beginners. 2013 年 3 月. UNESCO-PWRI-ICHARM
ユネスコスクール紹介 HP：<https://www.unesco-school.mext.go.jp/materials/world-handbook-on-local-disaster-management-experiences/> (2022 年 9 月 22 日アクセス)
2. 杉本めぐみ 編著代表「九州の防災―熊本地震からあなたの身の守り方を学ぶ」2018 年. 九州の防災編集委員会.
JST 研究紹介 URL：https://www.jst.go.jp/ristex/variety/action_report/20180330_01.html
(2022 年 9 月 22 日アクセス)
3. 西日本新聞 2022 年 7 月 20 日後悔しない備え「歯科医師の災害支援 幅広く健康維持にも尽力」：<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/959376/> (2022 年 9 月 22 日アクセス 水曜隔週連載中)

略歴：

京都府生まれ。京都大学大学院修了（地球環境学博士）。東京大学地震研究所特任研究員などを経て、2014 年度から九州大学、20 年度から准教授（男女共同参画推進室）。専門は防災教育、災害リスクマネジメント。在インドネシア日本国大使館経済班や日本赤十字社で 2004 年スマトラ沖津波の復興と防災に携わる。「九州大学平成 29 年 7 月九州北部豪雨災害調査・復旧・復興支援団」メンバーとして福岡県防災賞(知事賞)受賞。NHK はっけんラジオ「めぐみ先生の防災力」コーナー月 2 回月曜出演中。

【教育講演】

歯学生に必要な漢方教育

講師 山崎 裕

北海道大学大学院歯学研究院 口腔健康科学分野 高齢者歯科学教室 教授

歯学生に漢方を教える意義は2つある。1つは歯科医師といえども高血圧症、糖尿病、骨粗鬆症など頻度の高い成人病に対する治療薬に関する基本的な知識は必要である。それと同様に、漢方薬は高齢者、特に地域医療の現場においては高頻度に使用されるため、歯科医師にとっても漢方薬に対する基本的な理解は必要になる。もう1つは歯科でも現在、保険で処方可能な漢方薬は11種に広がり、この使用に慣れておくことで、診療の幅は広がり患者にも恩恵をもたらすからである。折しも、今年度の歯科医師国家試験から漢方に関しての出題が決まっており、漢方に注目が集まってきている。

小生の担当する高齢者歯科では、4年次学生に対して8年前から90分1コマの漢方講義を行ってきた。1コマしかない講義で少しでも漢方に馴染んでもらうため、講義冒頭で漢方薬を試飲させてから講義を行うことで、それなりの導入効果はあった。そして2年前からは、5年次の選択科目として少人数での漢方セミナー「漢方体験：5種の漢方薬の飲み比べ」を開講したところ、多くの学生が応募してきた。ここでは、漢方用語や漢方理論は可及的に使用しないように配慮し、いかに漢方に興味を抱かせるかを念頭に内容を組み立てている。漢方薬はいまだ、胡散臭い、信頼性に欠ける、高い、苦い・臭い・不味い、即効性がないなどの印象を医療者においても持たれている。しかし、西洋薬との優越を競うものではなく、あくまで西洋薬が効かない、使えない場合の補完医療としての立ち位置がぶれなければ非常に魅力的なものになるのは間違いない。

当日の教育講演では、学生教育を通して漢方の魅力を紹介したい。

略歴：

1985年	北海道大学歯学部卒業
1985年	北海道大学歯学部第一口腔外科入局（現：口腔診断内科）
1993年	北海道大学歯学部助手
2006年	北海道大学病院講師
2013年	北海道大学大学院歯学研究科口腔健康科学講座 高齢者歯科学教室教授
2022年	北海道大学病院 病院長補佐

【シンポジウム 2】 健康長寿社会に向けた連携教育体制

1. 薬剤関連顎骨壊死の予防を通じて若手口腔外科医に医科歯科連携を教育

講師 岸本裕充

兵庫医科大学医学部歯科口腔外科学講座 主任教授

骨粗鬆症の進行に伴う高齢者の脆弱性骨折は、「骨折のドミノ」と呼ばれるように、椎体の骨折を生じた患者では、大腿骨の骨折のリスクも大きく上昇する。骨折は治せる疾患のイメージであるが、高齢者の大腿骨骨折は「骨卒中」として、生命予後に大きく影響を及ぼす。この脆弱性骨折を予防するために、ビスホスホネートに代表される骨吸収抑制薬（ARA）が投与されるが、その副作用として顎骨骨髓炎・顎骨壊死（MRONJ）を生じるリスクがある。

当初は、できるだけ抜歯などの侵襲的歯科処置を避ける、抜歯前には ARA を 2～3 か月休薬、という対応が一般的であったが、「感染源となり保存困難な歯は抜歯しておく」、「ARA の休薬は不要」というように変わってきた。医科・歯科それぞれにおいて、MRONJ に関する情報のアップデートには差があり、連携での情報交換時に配慮が求められる。

若手口腔外科医が、高齢者の気持ちにも寄り添いながら、医科歯科連携を学ぶには、ARA を使用中の患者を担当することが非常に適していると考えている。

略歴:

1989 年 3 月 大阪大学歯学部卒業

1989 年 6 月 兵庫医科大学病院臨床研修医(歯科口腔外科)

1996 年 9 月 兵庫医科大学歯科口腔外科学講座 助手

2002 年 1 月～2004 年 1 月 米国インディアナ大学医学部外科ポスドク

2005 年 4 月 兵庫医科大学歯科口腔外科学講座 講師

2009 年 4 月 同 准教授

2013 年 4 月 同 主任教授、現在にいたる

所属学会等:

日本口腔外科学会認定 口腔外科専門医、同 指導医

日本口腔インプラント学会認定 専門医、同 指導医

ICD 制度協議会認定 インфекションコントロールドクター

日本口腔感染症学会 理事長

日本口腔外科学会 理事

日本歯科薬物療法学会 理事

日本口腔リハビリテーション学会 理事

日本有病者歯科医療法学会 理事

口腔顔面神経機能学会 理事、ほか

2. アクティブラーニング「チーム医療学」の実践

講師 吉田礼子

鹿児島大学病院 歯科総合診療部 診療講師

超高齢社会において、患者や家族を中心とした質の高い医療のニーズや、診療技術の高度化や複雑化に伴う医療現場の変化に対応するために、多種多様な医療スタッフがそれぞれの専門性を生かしながら、多職種で連携し協働するチーム医療の重要性が高まり、それを担う医療人育成が求められている。歯科医学においても、「患者中心のチーム医療」や「医科歯科連携」など関連する教育がすすめられている。

鹿児島大学歯学部では、平成 27 年度入学生より、アウトカム基盤型教育に基づく新カリキュラムを導入し、そのコンピテンスの一つとして「歯科医師の職責とコミュニケーション」を掲げ、全人的医療の理解を目指した系統的な教育を行っている。その構成科目である「チーム医療学」は、平成 30 年度から 4 年生を対象に開講した。この科目では、歯科医師としての職責を認識し、他者との相互理解のもとに、協同して適切な医療を実践する能力を育成するため、事例を用いたグループ学習を中心とした授業構成をとっている。授業内容は、医学部での統合医療演習、医学教育における多職種連携ワークショップなどから示唆を得、様々な医療者教育の担当者と情報交換をしながら、教育環境や学習者のレディネスを考慮してブラッシュアップを図っている。

本シンポジウムでは、本学での「チーム医療学」について、関連する科目との連携や参考となる教育経験を交えながら紹介するとともに、今後のチーム医療教育、多職種連携教育の改善に繋がる機会になればと考えている。

略歴：

1988 年 鹿児島大学歯学部卒業

1992 年 鹿児島大学歯学部助手（歯科矯正学講座）

1995 年 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科（博士（歯学））

1996 年 宮崎医科大学医学部助手（歯科口腔外科）

2007 年 鹿児島大学附属病院診療講師（歯科総合診療部）

3. 地域包括ケアシステム（介護医療院）と学生教育

講師 岩佐康行

社会医療法人 原土井病院 副院長、歯科部長、摂食・栄養支援部長

当院では、2018 年度より九州大学歯学部²の学外臨床実習として、訪問歯科診療実習を受託している。当初は特別養護老人ホームや有料老人ホームなど複数の施設を訪問して、各施設の特徴を学んでもらっていた。しかし、2020 年度からは新しく開設された介護医療院だけを実習場所として、多職種による「食支援」を学んでもらうこととした。

食支援を教育目標としたのは、歯科が他職種と連携するために食支援が有効との演者の経験からである。食支援では、多職種による食事観察（ミールラウンド）が行われる。その場で対象者の「食べること」に関する問題点とその解決方法が検討されるが、ここに歯科医師・歯科衛生士が参加することで、口腔健康管理についても理解してもらえる。このことを学んでもらうために、介護医療院におけるミールラウンドの日を実習と同じ曜日に設定し、学生に見学してもらうこととした。

ここで、介護医療院とは療養病床等からの移行が進められている施設で、要介護者に対して同一施設内で医療と介護を一体的に提供する点に特徴がある。利用者の看取り、ターミナルを支えることも重要な役割のひとつと想定されているなど、幅広い役割を担うことが期待されている。したがって、1 か所でさまざまな症例を学べることも、学生実習における利点と考えている。

ところがタイミング悪く、COVID-19 の流行により 2020 年度は現地での実習が行えなくなってしまった。そこで、大学からの提案で訪問診療の様子を動画撮影（歯科医師の視点カメラと第三者の視点カメラ）して、それを教材として用いることで対応させていただいた。2021 年度も COVID-19 の影響があったが、流行の波が収まったタイミングで部分的にはあるが実習を行うことができた。本年度も徐々に COVID-19 の波が高くなっているが、現在のところは施設側の理解もあって実習を継続できている。

この COVID-19 の影響下における訪問診療について、2020 年以降の在宅療養支援歯科診療所²の届出数の減少が顕著、との日本歯科総合研究機構の報告がある。そのデータをみると、施設基準として求められている医科歯科連携や多職種連携が満たせないことが一因のようである。また、日本老年歯科医学会の 2021 年度全国支部長報告書では、COVID-19 感染拡大を通して地域包括ケアを再考しており、地域包括ケアシステムの中で歯科職種が居場所をみつけるための 4 点が提議されている。その 1 つに、多職種協働で行う「食支援」に参画することがあげられている。まとめると、歯科では地域における多（他）職種との連携が進んでいないことが COVID-19 の流行により明らかとなったこと、その連携を進める鍵として食支援が期待されていることが伺える。

介護医療院における学生教育は始まったばかりではあるが、大学とは異なる医療・介護の現場で多職種連携について学ぶことが可能であり、これからの歯科医療提供体制に求められる歯科医師を育成するために貢献できるものとする。

略歴：

1995 年 東京医科歯科大学 歯学部 卒業
2000 年 東京医科歯科大学大学院 口腔老化制御学分野 修了 歯学博士
東京医科歯科大学 歯学部附属病院 高齢者歯科 医員
2001 年 聖隷三方原病院 リハビリテーション科歯科を開設
原土井病院 歯科常勤医となり、現在に至る

臨床教授 九州大学歯学部（高齢者歯科・全身管理歯科）
非常勤講師 九州大学（医学部保健学科、高齢者歯科・全身管理歯科）
東京医科歯科大学（歯学部口腔保健学科）
九州歯科大学（総合診療学分野）
博多メディカル専門学校（歯科衛生士科）

所属学会等：

日本老年歯科医学会 専門医・指導医、理事（地域包括ケア委員会）
日本摂食嚥下リハビリテーション学会 認定士、評議員
日本臨床栄養代謝学会 認定歯科医
日本抗加齢医学会 専門医